

昭和の南海地震体験談

氏 名:古守 かね子(こもり かねこ)
生年月日:大正 15 年 5 月 14 日
地震を体験した場所:白浜町
当時の家族状況:父、母、姪



1) 地震発生時の状況

当時、20 歳、小学校の教諭していた私は、姪と隠居屋の一階で寝ていた。

父母は母屋で寝ていた。

“ガタガタ”揺れる中、電気が点かず、頭から綿入れを被って、神棚から櫛が落ち、襖が倒れる中、揺れの収まるのを、姪と抱き合って待つ。

余震の中、表に出ると、母屋から、母の「戸が開かない」と言う声で、私も表から開けようとするが開かない、しばらくしたら、開いて、母も表に出ることが出来た。

それから全員戻って、着替えて、父は布団を頭から被り、母は米を 1 斗持ち、私は大きな風呂敷に着物を包み、腋に、学校の子供達の成績など入った鞆を挟み、鉄道線路まで行き、線路伝いに山を目指して逃げた。

2) 津波襲来時の状況

家で荷物を詰めている時に、「津波や!」と叫ぶ声と“ザザー”と言う音が聞こえた。父が、「線路、線路！ひと目！トンネル！いこら！」と言って、慌てて逃げている途中、川に架かっていた鉄橋の上で、足に小船が当たった。その時、尻餅をつき、鞆を落とす。

母は米を放った。何とか、山のトンネルまで行き、父が焚き火をしてくれた。近所も同じトンネルに逃げて来ていた。そこで聞いた叫び声や、牛の鳴き声は未だに忘れられない。暗いトンネル口に家族バラバラに避難した人が、家族を探して呼ぶ声も忘れられない。

3) 家族の行動・被害

同じ所に、一緒に逃げて、全員無事。

4) 集落・周囲の被害

集落では 2 人死亡(一人は寝たきりの老人で、1 人は高校生の男の子、慌てて海に逃げて波に持って行かれた)、家の前の、線路の向かいの家、三軒流出、自宅の納屋は、倒壊、母屋は屋根と柱だけになり、隠居屋は壁が落ちた。

5) 地震・津波後の生活

被災から一週間ほどは、親類の家で泊めてもらう。姪は、40km離れた土地から、歩いて迎えに姉が来た時に抱き合って泣き、付き添われ歩いて帰って行った。

家は、ぼちぼち修理してゆく。高校の学生さんたちが手伝ってくれたりして、本当にゆっくり直していった。

学校は少しの間、休校になり、自分の家の流出品を捜したり、片づけしたり、同僚が来てくれて助けてくれたり、着物や下駄を届けてくれた。落とした鞆が届いて、無事子供達に、通知表を、渡すことが出来た。

父母は、津波でめちゃくちゃになった家や田畑を見て、ショックだったのか、最低限の事だけしか出来なくなって、勤務する学校の休校の間、父の変わりに田畑の事、境界さえ分からなくなって、父が立会いの元、周囲の田畑を決めて崩れてしまった所を直していった。

結局、女4人姉妹の末っ子で、上から順番に嫁いでしまったので、家のことを考えると勤め続けるのも限界で、田畑を手伝ってくれた青年と結婚する。ここで人生が変わった。

6) 次の災害への備え

水、現金、電池(懐中電灯)は要ると思った。今も枕元に置いて寝ている。

川の幅が広がったこと。国道が出来て、堤防を兼ねている事、あの地震津波の時より、生活も良くなったが、当時住んでいた場所から引っ越した。

大きな地震が揺ったら、小学校に逃げるつもりだ。

7) その他

富田の日神社には、宝永地震の津波警告板があり、毎年、飛鳥神社の例祭に参拝者に、天変地異に対する注意を喚起している